

<実践報告>

小学校第1学年（文字学習入門期）における平仮名の概形理解  
 – ICT を活用した書写学習の実践例 –

小林比出代 信州大学学術研究院教育学系

The Understanding of the Basic Shapes of *Hiragana* in the First Grade  
 (Introductory Period of Character Learning): Examples of Handwriting  
 Learning Using ICT

KOBAYASHI Hideyo: Institute of Education, Shinshu University

研究の目的	国語科書写の教材開発における ICT の具体的な活用方法を、コンピュータの初歩的な機能を用いて検討すること。
キーワード	ICT 活用 書写 文字学習入門期 文字の概形 平仮名
実践の目的	小学校第1学年を対象にした、「平仮名の概形」に関する理解を促すための、ICT を活用した教材の作成と検討。
実践者名	執筆者と同じ
対象者	信州大学大学院教育学研究科(教職大学院)1年生 (3名) 信州大学教育学部国語教育コース2年生 (20名)
実践期間	2020年4月～7月
実践研究の方法と経過	オンライン前提の授業形態との、2020年度の特異状況も勘案した観点から、「書写学習の教材開発における ICT の活用」との課題を設定し、①～③の方法と過程で実施した。①本稿執筆者(小林)が、小学校第1学年の児童を対象とした、平仮名の概形に関する理解を促すために有効と考える、ICT を活用した教材例を作成し、教職大学院授業「国語科教材開発演習」にて提示した。②①の例を参考に、当該授業受講者が各自教材を制作し、授業にて検討を重ねた。③②の上で、学部2年生授業「コンピュータ利用教育」にて同じ課題を設定し、受講者が当該課題を作成考察した。
実践から得られた知見・提言	○書写学習において児童の理解を促すための、ICT の具体的な活用方法の模索と会得。 ○書写学習及び低学年の学習者と ICT 機器の活用との接点(結びつき)。 ○Power Point の基本的機能を用いて簡易に作成できる書写教材の認知。 ○書写学習における、ICT を用いた学習指導方法とこれまで通常行われてきている学習指導方法それぞれの利点や在り方。

## 1. はじめに

### 1.1 研究の背景及び目的

本論者は、国語科書写の教材開発に関して、学部での専門授業を始めたばかりの2年生、及び専門知の深化に努めている教職大学院1年生が、「書写学習においては、例えばこのようなICTの活用方法が考えられる」との実践案を具体的に制作検討することを目的とする。

書写学習とICTの活用は接点を持ちにくいとのイメージもあり、これまで活発な論議は展開しにくかったのが実状である。しかし、本年度(2020年度)の新型コロナウイルス感染症拡大防止対策に伴う、オンラインを前提とした授業形態を特に考慮するととの現況が相俟って、「書写学習の教材開発におけるICTの活用」との観点から、授業内容や学習課題を検討し設定する必要性が喫緊のものとなった。

折しも、2020(令和2)年は、2017(平成29)年に告示された新しい学習指導要領が全国の小学校で完全実施になった年である。新しい学習指導要領の国語科書写では、字形と運動のバランスを考慮した改訂がなされた。今回の学習指導要領に至るまでに、平成10年版学習指導要領では、字形やその整え方に関する事項を前面に出した、基礎基本の徹底を図っており、続く平成20年版の学習指導要領では、動き、すなわち書字過程に着目した。今回の学習指導要領は、その両者がそれぞれに呈した、字形と運動(=運筆、文字を書く過程)とのバランスがとれた学習を求める、平成20年版のブラッシュアップが図られた改訂になっている。

新しい小学校学習指導要領「国語」の「第2各学年の目標及び内容 2 内容 [知識及び技能]」には「(3)ウ 書写に関する次の事項を理解し使うこと。」として、「[第1学年及び第2学年] (イ) 点画の書き方や文字の形に注意しながら、筆順に従って丁寧に書くこと。」<sup>1</sup>と明示されている。この点に関し、『国語科書写の理論と実践』には、「小学校第1学年の入門期の平仮名学習では、平仮名の概形を左図のような図形〔図1〕参照〕になぞらえて、理解を図ることがある。」<sup>2</sup>との説明がある。

このように学習を求められている、文字、ここでは平仮名の概形の把握であるが、小学校低学年の児童は、図形の詳細を認識するにはまだ難しい発達段階にあるとされる〔「1.2」参照〕。そこで、ICTの活用、かつ、学部での授業が始まったばかりの学生、ないしは日々の教育活動に多忙な先生方の実情に鑑み、ICTの初級的な機能を活用して、当該学習に関し児童の理解を促すことができる教材の作成を検討することとした。

### 1.2 小学校第1学年の児童における図形認識

山口ほか(2008)によると、○や△等は生後2か月から識別が可能である<sup>3</sup>。ただし、



図1 『国語科書写の理論と実践』 萱原書房、2020、p. 32

大迫（1995）の眼科学の知見「新生児の視力は 0.01 程度で、明暗はわかるが形の認識はできず、両眼視も十分できない状態にあり、生後 6 ヶ月で 0.04～0.08 程度となる」<sup>4</sup>を参照し、図形それぞれの形を視覚で確認するのみでなく、その形の理解や認識までも含めた場合、○△等の視知覚と同時に形の定義も認識していると断定できるのは、それらの描画が成立した時期、すなわち村田（1981）に示される描画の発達<sup>5</sup>での象徴期やカタログ期に相当すると考えられる。また、村田（1981）<sup>6</sup>から少なくとも 5 歳頃には基本的な図形を描画していることがわかり、よってこの時期には図形認識は成立していると考えられる。

一方、川崎ほか（2011）は、「小学校における算数としての図形認識から中学校における数学の図形認識へと移行を促す押し上げ教材の開発と小学校算数科における図形指導の再構成が今日求められている」として、「算数から数学への移行」を促す学習指導の枠組みに基づき、義務教育 9 か年の図形領域のカリキュラムを開発すること」を目的とした研究において、「幼稚園＋小学校 1 年」の「図形指導のカリキュラム構想」での「必要な視点」に「形遊び、造形」や「図形に関する経験を豊かにする」を設け、「方法」として「操作活動を充実させ、色板や三角、四角、丸などで、形遊び、造形遊びを行う」と述べている<sup>7</sup>。また、妹尾ほか（2013）では、「小中一貫の図形指導の構想」として、「幼稚園～小 2」における「期待される子どもの姿」に、「身のまわりにあるものを形として捉える」と「図形の性質を理解する」を挙げている<sup>8</sup>。

これらの先行研究から、書写学習に関しても、小学校第 1 学年の児童が平仮名の形を日常生活の中で身近に存在している（感じている）事物の形になぞらえることは、平仮名の概形理解を促すために有効であると推察される。その際、書写学習の教材を ICT の活用によって作成することは、当該児童の図形認識を育み、さらには、平仮名の概形理解を深化させるために有用であると考えられる。

## 2. 研究方法及び実践の状況

### 2.1 事前準備と授業受講生への課題

実際に平仮名の概形に関する ICT 教材を作成するにあたり、教職大学院授業「国語科教材開発演習」及び学部 2 年生授業「コンピュータ利用教育」の受講生に示した手順は次の通りである。

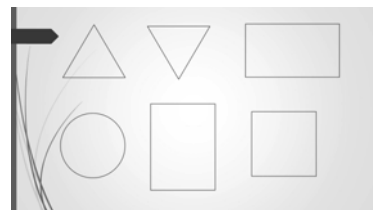


図 2 基本的な図形

①Power Point の好きなスライドデザインを決め（ただし、「小学校第 1 学年の児童に授業の教材として示す Power Point である」との認識を持ってスライドデザインを考える）、ツールバーの「挿入」の中にある「図形」から基本的な図形を選ぶ〔「図 2」参照〕。

②1 つめの方法として、Power Point に設定されている「アニメーション」機



図 3 「アニメーション」機能を用いない方法

能を使わなくても作成できるシンプルな方法を紹介する〔「図3」参照〕。

はじめに、スクリーンの中程に学習の対象とする概形を視覚的に示す図形(ここでは「正三角形」)を提示し、そこに学習対象の平仮名を当てはめて提示すると、前のページと連続して、「正三角形」の概形図形の中に平仮名の「あ」がスライドして入ってきたように見える。なお、児童自身は実際に学習対象の文字を手書きする点を勘案すると、この Power Point で使用する活字フォントは、手書きの文字を意識した「教科書体」や「正楷書体」等を用いた方がいい点も補足する。

③次に、Power Point の「アニメーション」機能による作成方法を紹介する〔「図4」参照〕。

④基本的な作業方法が確認できたところで、本授業での課題「小学校第1学年の児童を学習者とした、「平仮名の概形」に関する理解を促す、クイズ形式のPowerPointのスライドを制作する」について説明する。例として、最初に「図5」上段のように問題を提示するスライドを作成し、続いて「図5」下段のように正解を明示したスライドを作成提示するとの具体案を示す。なお、「概形」との用語では、小学校第1学年の児童には理解が難しく学習が促せないので、学習者の発達段階に適した用語に置き換えて作成する旨注意を与える。課題提出に関して提示した条件と留意点を次に記す。

- 1枚めのスライドは課題タイトル及び学籍番号と氏名を記した表紙とし、2枚めと3枚めを本文スライドとして、合計3枚のスライドに収めること。
- 3枚めの後、一番後ろのスライドに課題を作成しての感想をまとめること(200字以上)。  
→よって、スライドの総計は4枚になる。
- 「平仮名の概形」に関して理解を促すICT補助教材である点を熟慮すること。
- 『国語科書写の理論と実践』(全国大学書写書道教育学会編 萱原書房) p.32 と p.39 を参照すること。

⑤まず、教職大学院授業「国語科教材開発演習」にて、



図4 「アニメーション」機能を用いる方法



図5 「平仮名の概形」に関する理解を促すクイズ形式のスライド



図6 平仮名の概形  
※『明解 書写教育』(全国大学書写書道教育学会編 萱原書房 2009) pp.134-135  
に小林加筆

受講者が各自制作した教材を発表し、検討を重ねる。その結果をふまえて、学部2年生授業「コンピュータ利用教育」にて、受講者が当該課題を作成考察する。

## 2.2 教職大学院授業「国語科教材開発演習」において受講者が制作した教材の発表と検討

小学校第1学年の児童が平仮名の形を身近に感じる事物の形になぞらえるとの視点から、概形を家に模して考えた教材が2件発表された。そのうち1件は、受講者自身の専門分野である英語教育において、ローマ字（アルファベット）の指導時に、練習ノートに付された補助線を利用して「一階建て、二階建て、地下室」と例えることに拠った指導実践<sup>9</sup>を応用

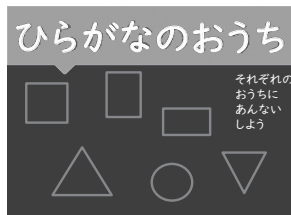
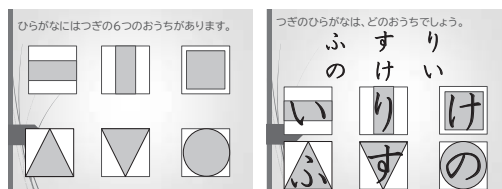


図7 院生成成の教材 I

したものである〔図7参照〕。「家に見立てるのならば、実際に動くと思案している雰囲気が出るかと思ったので、軌跡を描くように移動するアニメーションを付けた」との工夫もなされている。



概形を家に模したもう1件の教材は、小学校第1学年との発達段階を考慮した結果、「(原案〔図8〕上段)を身近なモノの名前で示そうかと考えた」が、「モノに例えた場合の難しさも同時に感じ、平易な図形を表す言葉なら理解できるであろうという考えの基、図形の名前を示した」との修正を加えた。また、それぞれの概形の違いを明確に表すために概形ごとに色分けをすとの工夫も施した。当該教材の検討後には、「教材を作る際には、その指導内容とその教材で学ぶ児童生徒の発達段階の両方を大切にすることがあることを改めて考えさせられた」と記している。

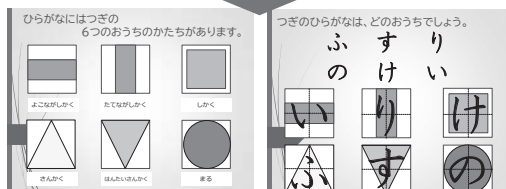
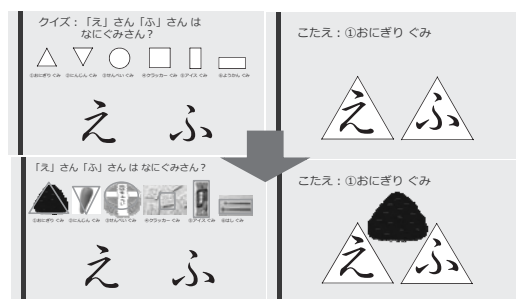


図8 院生成成の教材 II

(上：原案 下：検討後)

さらには、概形を当てはめる際に、「「ひらがな」が小学校に通っていて、類似した形で組分けがされている」との物語を想定することで、概形と平仮名の結びつきがより意識できるように工夫した教材がある〔図9〕。



- おにぎり・せんべい いらすとや  
<https://www.irasutoya.com/>
- にんじん 楽天ネットスーパー  
<https://sm.rakuten.co.jp/item/1385226209>
- クラッカー たべるご <https://taberugo.net/3962>
- あずきパー 井村屋  
<https://www.imuraya.co.jp/goods/ice/c-azuki/azuki65/>
- 箸 PINT <https://pint.mn/?pid=90215168>

図9 院生成成の教材 III (上：原案 下：検討後)

図形も「おにぎり」や「にんじん」といった児童の身近に実在する事物に当てはめること

で理解を促すように努めている。当該教材の検討後には、特に縦長の長方形と横長の長方形との違いが不明瞭であったところを、例示する事物の実際の画像を背景に提示することで改善した。また、「ひらがな小学校」に通っている「ひらがな」が、その中で迷ってしまった「え」「ふ」を助けるというストーリーを用意することで学習活動に入りやすくなるようにした」との工夫も加えた。

### 3. 実践から得られた知見と考察

#### 3.1 教職大学院生のコメントから

当該授業を受講し、「2.2」での教材を作成した上で記した教職大学院生のコメントから、国語科書写の教材開発における、コンピュータの初歩的な機能を用いた ICT の具体的な活用方法について考察する。なお、院生のコメントは、全て本人が表記したままに記載する。

まず、「小学校 1 年生児童に対する指導と ICT 機器の活用が結びついておらず、先入観として ICT 機器は、高い学齢の児童や生徒の指導に有効に働くという思い込みがあった。今回の課題を通して、その学年に応じた ICT 機器の活用の仕方があることも知ることができた。」及び、「ICT 機器を用いた書写指導という、教師が書く文字や運筆を動画にして提示を行うという方法は用いたことがあったが、今回の課題を通して、手本や字形を提示するという活用の方法があることを知った。今回 Power Point を用いてスライドを作成したが、とても簡単に作成することができ、毛筆指導においても、活用できそうだと感じた。」とのコメントから、本授業において例として挙げた ICT 教材は、学習指導者が、書写学習及び低学年の学習者と ICT 機器の活用との接点を見出し、かつ接合するのに有効であると考えられる。さらには、書写学習に関する、児童の理解を促すための ICT の具体的な活用方法を模索し、その習得が図られたとも解釈できる。また、当該教材を提示（例示）したことは、Power Point の基本的な機能を用いて簡易に作成できる書写教材に関して認知を図るための一助になっていると推考できる。

その上で、「文部科学省（2010）『教育の情報化に関する手引き』<sup>10</sup>によれば、教科指導における ICT 活用では、インタラクティブ性を保障することが大切だとされているが、私自身具体的な場面を思い浮かべることができなかった。今回、教材を作ってみて、クイズ形式のように、ICT で提示した教材を活かした発問（教材によって学ぶ）をすることで、インタラクティブ性を高めることができるのではないかと考えた。」とのコメントから、同一の学習目標のもとで同一の ICT 機能を用いて書写教材を作成する場合においても、ICT 教材における双方向性との観点から、その具体的な形式や提示方法を工夫することによって、さらに教材としての意義が深化することも理解できる。「ICT を学ぶ」のか「ICT で学ぶ」のか、原点に立ち返っての教材作成が肝要となる。

一方で、「授業の中では主に ICT を用いることの良さを中心に話してきたが、この教材を作りながら、何かアナログな方式に劣っている点は何だろうか、と、絶えず考えていた。それは、授業中の柔軟性に欠けることではないかと考えた。例えば、授業中、早く問題が

終わってしまい、子供がまだやりたそうな時、ICT活用ではとっさに問題をつくる事が難しいのではないかと考えた。ICTを扱う際にはその限界もまた把握し、対策を考えておく必要があると考えた。」や、「今回の教材は、黒板を使ってもおなじことができますと思います。（紙に書いたひらがなを移動させるなど）ICTの利点を概形の指導にどのように利用することができるだろうと思いました。」とのコメントから、書写学習における、ICTを用いた学習（指導）方法と、これまで通常行われてきている学習（指導）方法それぞれの利点や在り方を検討する必要性があるといえる。ICTを用いた教材と、アナログな方法を用いた教材各々の持ち味や特性を熟考し、その特長に鑑みた上で、児童生徒に習熟させるべき、その学習で求められる学力の育成に応じた方法の選択が必須となる。

### 3.2 学部授業「コンピュータ利用教育」受講生のコメントから

「2.2」及び「3.1」をふまえて、学部2年生授業「コンピュータ利用教育」（本年度国語教育コースでは教員4名がオムニバス形式で担当）の筆者担当回において、当該課題の作成と考察を試みた。本授業内容の実施時期は2020年6月下旬、すなわち、受講生が学部へ上がって間もない、臨床経験科目の学習が未だ満たされていない時期、かつ、本年度の特殊な事情に則り、基本的にはオンラインによって授業が実施されている時期にあたる。

本課題制作に際しての受講生からのコメントの一部を、「3.1」における考察をふまえた見出しに分類して列挙する。なお、それぞれのコメントは、院生からのコメントの記載と同様に、全て本人が表記したままに記述する。

#### 【書写学習における児童の理解を促すためのICTの具体的活用法の模索及び会得】

○ICT教材の活用の多様性を感じた。国語、文字の学習ではどのようにICTを活用していけばいいのか全く分からなかった。そうした学習の仕方では教わったことがなかったので、このように活用することで、文字の形について理解を深めることができるのだと思い、とても勉強になった。ひらがなの概形についてもよく考える機会となった。スライド上、デジタル文字では形にパッと合わせることができても板書等で書いていなければ子どもたちに普段の文字で意識してもらえない。子どもたちの見本となる文字をかけるよう、自分自身で文字を書くとき概形を意識していきたいと改めて思った。

○クイズ形式にすることで、楽しく文字のおよそのかたちについて知ることができ、日常生活につなげていくことができることがわかった。

#### 【書写学習及び低学年の学習者とICT機器の活用との接点】

○平仮名・片仮名・漢字にそれほど親しみを持っていないだろう児童を想定して問題を作成するのは初めてだったので、作業は難航したが、「文字」を「形」として捉える面白み

を自分でも理解することができたと思う。小学校一年生に対しては、「平仮名を書くことができる」という前提を捨てなければならないため、単に「平仮名の概形」という要素だけで興味や関心を持たせる必要があるという点、さらに、「どのようなものの名前を知っているのか」を想定しづらいという点で非常な苦勞を要した。前提となる知識を想定できない対象にものを教えるということの難しさを痛感した。

#### 【Power Point の基本的機能を用いた簡易に作成可能な書写教材の認知】

○パワーポイントを活用してひらがなの概形を捉える資料を作る、という活動をしてみて図形を使ったりする場合にすごく効果的なやり方であると感じられた。黒板に文字を書き、そこに図形を書き加えるというやり方でも同じような授業内容をすることはできると思うが、簡単なアニメーションを加えるだけで、画面の中では文字が図形の中に入ったという印象が与えられる。

#### 【書写学習における ICT を用いた学習指導法と通常の学習指導法との比較と検討】

○児童の反応によって内容を変えたりすることが難しくなるので、そういったところをどうするのか、ということも作成しながら気になっていた。課題作成を通して、コンピュータを活用した授業資料作りのよさ、難しさを感じられたということは貴重であると感じる。

○概形にうまくひらがなを合わせるのが難しく、微調整をしようと思うとおりにいかず苦戦することが多かった。そのような意味では、パワーポイントなどを使わずに手造りのでも同じようにできるのではないかと感じた。パワーポイントでしかできないというところを見つけることができなかつたところが改善点である。

○本課題は ICT 補助教材として作成したが、児童たちには、紙とペンを持った状態で授業に臨み、問題を解く過程で様々な平仮名を書いてみてほしいと思った。その意味で、「文字を書きたい」と思わせられるような問題作りを追究する必要があると感じた。

○実際の授業を思い浮かべながら作成したが、スライドは変更が利かないため、予想外の発言が出たときにどのように即座にサポートするかが難しいと思った。

#### 4. 展望と課題

本論考で作成を試みた、Power Point を用いた書写学習の教材は、ICT に関わる技能面から考えると大変に初歩的なものである。本論考では、その初歩的な機能を、書写学習で



の ICT を活用した教材において、どのように運用できるかとの観点から考察した。Power Point の基本的な機能を用いた簡便に作成可能な書写教材を認知し、書写学習における児童の理解を促すための ICT の具体的な活用方法を会得するには、一定の効用があったと考えられる。また、書写学習及び低学年の学習者と ICT 機器の活用との結びつきについて理解するにも有用であったと捉えられる。このような学習効果があったために、受講生から、書写学習における、ICT を用いた学習指導方法とこれまで通常行われてきている学習指導方法それぞれの利点や在り方について改めて考えるとの姿勢が生まれたとも推察できる。

大学院生が指摘し、同一な内容を学部生も表現を変えてコメントしていた、「ICT 教材がアナログな方式に劣っている点は何か」(＝「アナログな方式」にしかできないことや利点は何か)や「書写学習において ICT 教材にしかできないことは何か」(＝「アナログな方式」にはできないことは何か)との問いは、筆者自身も持ち続けていたものである。受講生がそれぞれにコメントした内容は、ICT を用いる授業と、これまで通常とされてきた授業の、それぞれの在り方を考える際に大事な視点になると考える。文字学習や書写学習においての、ICT を用いた学習(指導)方法と、これまで通常行われてきている学習(指導)方法、それぞれの特性と効果的な活用方法については、さらに考察を重ねていきたい。

なお、学部生からは、「この教材の中で個人的に興味があったのは「ぬ」と「め」や「る」と「ろ」のように、一見して形の似ている平仮名が、実は別々の概形に当てはまるという点である。」とのコメントが寄せられた。例えば、「ぬ」と「め」は似ている平仮名であるにもかかわらずその概形が異なる理由は、これらの平仮名の字源にあたりと理解が促せる。実際には、小学校第 1 学年からは少し上の発達段階になってのことであるが、平仮名とその字源を結びつけての学習は、文字学習や文字文化の学習において効果的である。さらに、文字学習入門期から中学年や高学年に成長した児童が、自分自身の平仮名の書きぶりを客観的にみつめて、平仮名の書き方を再度学習し直せる好機に成り得る点においても有意義な学習となること等を勘案した時に、学習指導者は、書写そのもの、及び、その学習内容や指導方法に関する専門知も深めながら教材を作成する必要性を再認識した。

また、本年度の授業に特化して検証する際に、本年度起こっている未曾有の現況や混乱から、場合によっては、オンラインによる学習が ICT を活用した学習と同義に捉えられる向きも懸念している。既述した文言ではあるが、「ICT を学ぶ」のか「ICT で学ぶ」のか、立ち位置の軸をぶらさずに、さらに考察と検討を深めたい。

**謝辞** 本論考を執筆するにあたり、書写学習における ICT を活用した教材に関しましては向山和男氏から、「1.2」の執筆に関しましては水口崇先生からご教示を賜りました。また、本論考での考察にあたっては、2020 年度「国語科教材開発演習」を受講した教職大学院生のお三名と、国語教育コース 2 年生の皆さんにご協力を戴きました。ここに記して深謝申し上げます。

- 
- 1 文部科学省 HP [https://www.mext.go.jp/content/1413522\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1413522_001.pdf) (2020年6月29日閲覧)
  - 2 全国大学書写書道教育学会編, 2020, 国語科書写の理論と実践, 萱原書房, p.32
  - 3 山口真美, 金沢創, 2008, 知覚・認知の発達心理学入門, 北大路書房, p.18
  - 4 大迫茂人, 1995, 耳・鼻・咽喉・言語の病気, ぎょうせい
  - 5 村田孝次, 1981, 児童心理学入門, 培風館, p.63
  - 6 村田孝次, 1981, 児童心理学入門, 培風館, pp.64-65
  - 7 川崎正盛, 村上良太, 妹尾進一, 木村恵子, 高淵千香子, 山中法子, 内田武瑠, 松浦武人, 植田敦三, 2011, 論理的な図形認識を促す算数・数学科カリキュラムの開発(2)－図形の性質の意識化に焦点を当てて－, 数学教育学研究, 17(1), pp.61-71
  - 8 妹尾進一, 村上良太, 鈴木昌二, 川崎正盛, 高淵千香子, 山中法子, 内田武瑠, 松浦武人, 木村恵子, 松浦武人, 植田敦三, 2013, 論理的な図形認識を促す算数・数学科カリキュラムの開発(3)－4年間の追跡による生徒の論理的な図形認識の変容についての考察－, 数学教育学研究, 19(1), pp.89-102
  - 9 山本玲子, 池本淳子, 2017, 英語学習につながるヘボン式ローマ字学習のための教材開発, 小学校英語教育学会誌(JES journal), 17(2), pp.38-53
  - 10 文部科学省 HP [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/detail/mext\\_00117.html](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/mext_00117.html) (2020年6月20日閲覧)

(2020年9月7日 受付)